

ひまわり訪問看護ステーション

症 例 概 要 利用者：80代 男性 要介護 2

利用期間：平成 28年4月 ～ 令和5年5月現在

経 過：平成26年2月に左上下肢の脱力出現し近医を受診。脳梗塞疑いで総合病院へ入院。左不全片麻痺あり、意識レベルは変化なく、その後リハビリテーション目的で転院。移動は車椅子軽介助レベルであった。

平成26年7月サービス付高齢者住宅に退院後、訪問リハビリ開始となり、T字杖介助歩行にて数10mの歩行訓練を実施していた。なお、糖尿病のためインシュリン自己注射を実施している。平成30年3月に3月両下肢の浮腫が著明となり左下腿に、うっ血性の皮膚潰瘍ができ看護師が毎日処置を行い、翌年8月に改善している。その後が大きな皮膚トラブルなく日々リハビリに取り組んでいる

内 容

他県に住む娘さんから、お孫さんが家族で温泉に行きたいと強い希望があり。コロナ渦でしばらく会えていなかったため、連れて行きたいが介護に不慣れなため手伝って欲しいと依頼あり。温泉保養施設での入浴介助を希望されていた。

本来、居宅サービスである事や介助状態で公衆浴場の入浴は高いリスクマネジメントが必要である事等のハードルがあるも、ご本人のキラキラとした笑顔を見たい。という一心で訪問看護で協力を実施。看護師とセラピスト1名ずつで対応することとなる。

もともとの床ずれ等の皮膚疾患が多い為、皮膚処置と治療具合を見て実施。当日は、娘さん御夫婦、お孫さんと親戚の方の計4名。公衆浴場である為、男性家族と職員に衣類の着脱を手伝ってもらいながら行い、車椅子で浴室近くまで移動し、両脇をスタッフで支えながら杖をつき浴室内を移動した。久々の大浴場で背中をお孫さんに洗ってもらい、ご本人やお孫さんもとても喜ばれました。

浴槽までも途中段差があったがスタッフ2名で支えながら移動し、浴槽に浸かる事も出来た。お風呂から上がる際も、スタッフは両脇を支えながら移動し、転倒なく車椅子まで移動できている。

娘さんの旦那さんからの話では、「以前も個室風呂がある宿で娘さんと一緒に介助してみたことがあったが、とても大変だった。2人来てもらえて助かりました」と。「本人からもお陰様で気持ちよく入れました。」と話される。

ご夫婦でサービス付き高齢者住宅に住まわれており、同じ住宅内の方との交流も少なく、2人で過ご

す事が多くなっていた。奥さんも久しぶりに娘さん達と会えて気分転換になったようで終始笑顔だった。娘さんからのご希望に応えた対応であったが、コロナ渦でしばらく会えていなかった家族交流の機会になりご利用者・ご家族がキラキラとした笑顔をされた症例である。